

【講義5】 近代において音楽とはいかなるものであったか
-〈藝術〉という認識の誕生_啓蒙思想と自律藝術

(18世紀～19世紀後半)

サウンドデザイン演習
女子美術大学 石井拓洋
takuyo.ishii (a) gmail.com

2019

1. 啓蒙思想から、
人間の創造性や理性の追究としての「藝術」へ

18世紀の近代ヨーロッパにおいて

「神に捧げるためでもなく、

王侯を賛美するためでもない、

『市民による、市民のための、市民の心に訴える音楽』が、

初めて生まれた」

[岡田 2005 :96]

「近代」とは？

きんだい 【近代】 modern age (※現代 = contemporary)

中世
↓
近世

11C頃 「封建社会」
17C頃 「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末 「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

テレビ 映画作品 『王妃マリー・アントワネット』 (2006, フランス制作, 抜粋10分間) ※ DVDでも出版されている



フランス革命の始まりだ

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的 **理性** を尊重し、**進歩主義** を標榜をした
 - 理性の追究 によって、**宗教的権威** や **王侯貴族** に抵抗した
 - 権威から自立し、自由と平等を有する個人、「市民」の誕生
 - 成果はフランスの『**百科全書**』（**ディドロ**ら編, 1751-80）に編纂
-
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

啓蒙思想の特徴：つまり「近代」(藝術)の特徴

- **西洋中心主義**

西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義**

物事 (藝術を含む) の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
→ 物事を細かく区分しようとする考え

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え

- **人間中心主義**

人間は科学によって、自然を制御することができるとする。〈自然 vs 精神 (人間の本质)〉の二元論。

啓蒙主義における「要素還元主義」の大きな拠り所

- 「**研究しようとする問題のおのをおのを、できうるかぎり多くの、そして、それらのものをよりよく解決するために求められるかぎり細かな、小部分に分割すること**」

デカルト『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫、原著1637年、29頁。

- 「**自然および諸物体をば、その単純成分において考察することは、知性を細かくし小さくするが、自然および物体を、その複合および組成において考察することは、知性を鈍化し弛緩させる**」

フランシス・ベーコン『ノブム・オルガヌム』桂寿一訳、岩波文庫、原著1620年、95頁。

文化的分野で、啓蒙主義的に宮廷文化を批判したのが、

ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 - 1768) ドイツの美術史家

『ギリシア美術模倣論』 (1755)



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

- 享樂的・感覚的な宮廷文化を表すバロック、ロココ文化の批判
- 美の規範を、古代ギリシャ藝術（彫刻）にもとめた。自然美よりも、人間による理性の美。
- 宮廷文化を「リセット」して、進歩的な人間による新文化の創設を志向した（新古典主義へ）



画像: <http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/vv009.htm>

《オイディプスとスフィンクス》 (1808)



画像: <http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/Ingres4.htm>

《グランド・オダリスク》 (1814)

ヴァンケルマンが良しとする様式

新古典主義絵画

ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)

啓蒙主義的芸術論としての

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）の主張

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

※ 人間もまた創造することができる。選ばれたものとしての「天才」。

※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。

なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美

（※ 人間の理性が介在した美）の両者をつなげる

最高の観念だから。線描への価値付け。

（ヴィンケルマン p.30）。

※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



啓蒙思想から、 人間の創造性や理性の追究としての「藝術」 概念の誕生

「『藝術』という概念がヨーロッパの芸術理論において確立したのは、
十八世紀中葉から末葉 にかけてのことである」

「十八世紀中葉以前には、今日われわれが『藝術』と呼んでいるもの
を〔略〕指し示す概念 ないし術語は 存在しなかった」

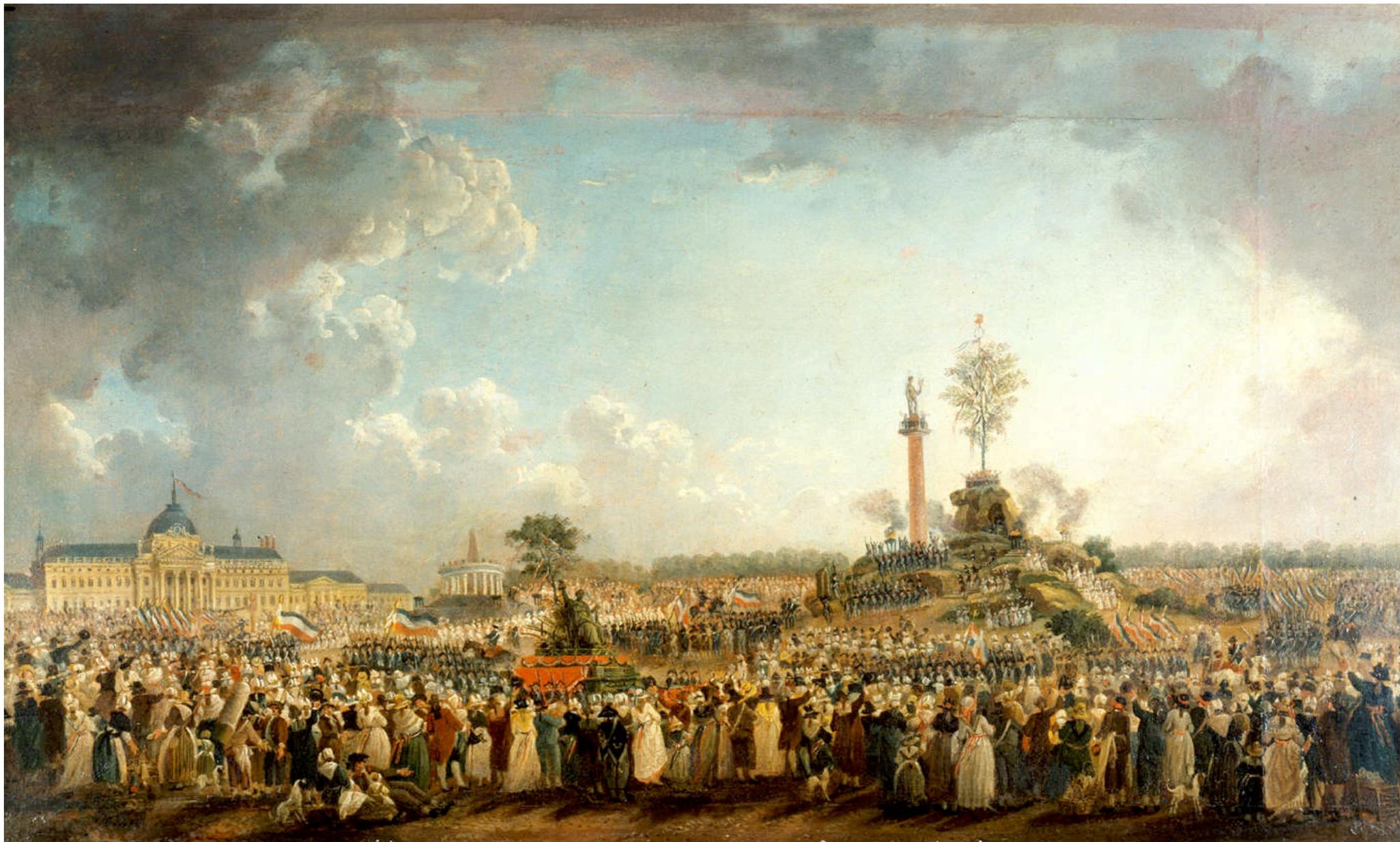
そのような意味で、「『藝術』という概念は「近代」の所産にほかならない」

※上記全て [小田部 2001: 3]

啓蒙思想から、
人間の創造性や理性の追究としての「藝術」 概念の誕生

18世紀ヨーロッパにおいて、
現代の我々が考える一般的な意味での
「藝術」という考え方がうまれる。

さらに、神や王はもちろん、そのほか科学など、人間のすべての活動とは区分される、
「自律藝術」という価値観へ



「最高存在の祭典」(フランス革命後、キリスト教を否定し、フランスで人為的につくられた合理的な人工的宗教の祭典)
“Festival of the Cult of the Supreme Being,” 1794

祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド

啓蒙思想と「藝術」(近代藝術)の関係

「啓蒙主義とはまさしく人間を『神』とする思想だった」

松宮秀治『芸術崇拜の思想』pp. 80-82.

「『藝術家』とは(※啓蒙思想に導かれて)理念的にはみずから神となって、
自己の作品を通じて、歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『創造者』となることである」

[松宮:67]

2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

古典派音楽の特徴

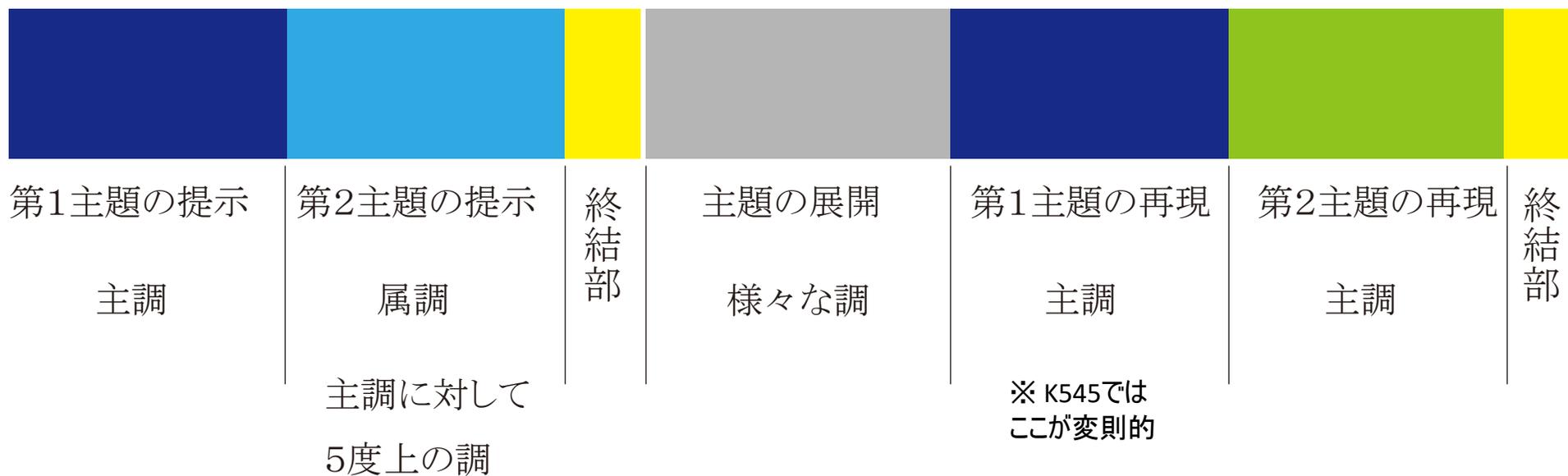
- ・音楽以外の要素になるべく頼らない**自律的な音楽表現**を追求
→ 声楽から**器楽**へ。器楽によって**音楽の本質**を追究。
- ・オペラ、協奏曲 から → **ピアノソナタ、交響曲、弦楽四重奏曲**へ
- ・宮廷音楽(王様のための音楽)から → 個性を表現する音楽の萌芽。
市民のための「演奏会」の萌芽 (18C)。
- ・対位法の様式(旋律の重なり)から → 和声音楽へ。
(**和音の合理的組織化**)。
- ・「**ソナタ形式**」=「自律的音楽」の性格が音楽構成法に具体的に現れたもの

古典派のソナタ形式とは

提示部

展開部

再現部



(※ モーツァルト ピアノソナタ 第15番 第1楽章 K545 の例で解説, 2分30秒)

正 (第1主題) - 反 (第2主題) - 合 (展開部をへて再現部)

論理的な性格をもつ〈弁証法〉的な構成



3. 「自律藝術」(自律美学) へ

自律化する「近代藝術」

- じりつ【自律】
 - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]
- 「西洋の近代藝術を規定している根本動向は自律化・純粹化の運動であると言われる」[国安：30]
- 啓蒙思想の「本質主義・還元主義」のあらわれ
- 〈唯一絶対の真理の本質〉をより純粹な形で呈示しようとする
- 主体性・独自性・創造性を尊ぶ、人間中心主義のあらわれ

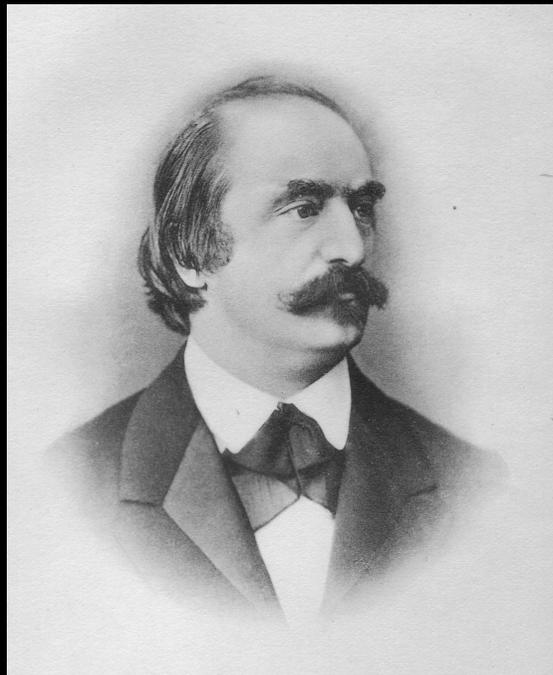
自律化する「近代藝術」

- ・ 「自律化・純粹化」を目指すとは、藝術が藝術の外の諸規定から自由となり、自分自身で成り立つ自立した存在となること。

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904, ウィーンの音楽批評家)

「音楽の内容は響きつつ動く形式である」

(ハンスリック, 76)



画像: <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

・「内容」 content ⇔ 「形式」 form

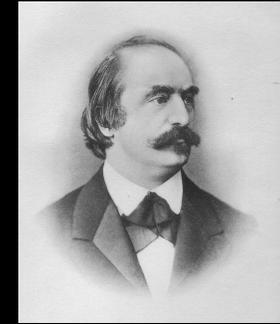
・「内容」
作品内のテーマ、感情、物語、思想など。

・「形式」
作品を構成する物理的な要素。「内容」以外。
音楽では音響、音型、構成など。
絵画では色、線、マチエール、構成など。
作品における「内容」の入れもの。

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904, ウィーンの音楽批評家)

音楽の「形式主義」 formalism の美学

器楽優位の思想を、フォルムの側面から学的厳密さをもって理論づけようとした(国安 132)。



画像: <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

・〈感情表現〉は音楽において不純なものと考えた

- 音楽の目的は感情表現ではない (⇔ バロック音楽と対照的)

・〈文学性〉など、音楽に外から加わる全ての「内容」を排除すべしとした

- 「詩と音楽または詩とオペラとの結合は身分違いの結婚である」(ハンスリック, 73)

- だから、ハンスリックは、ヴァーグナー(詩と音楽との融合を志向した人)が大嫌い

- 一方、ハンスリックはブラームスが好き

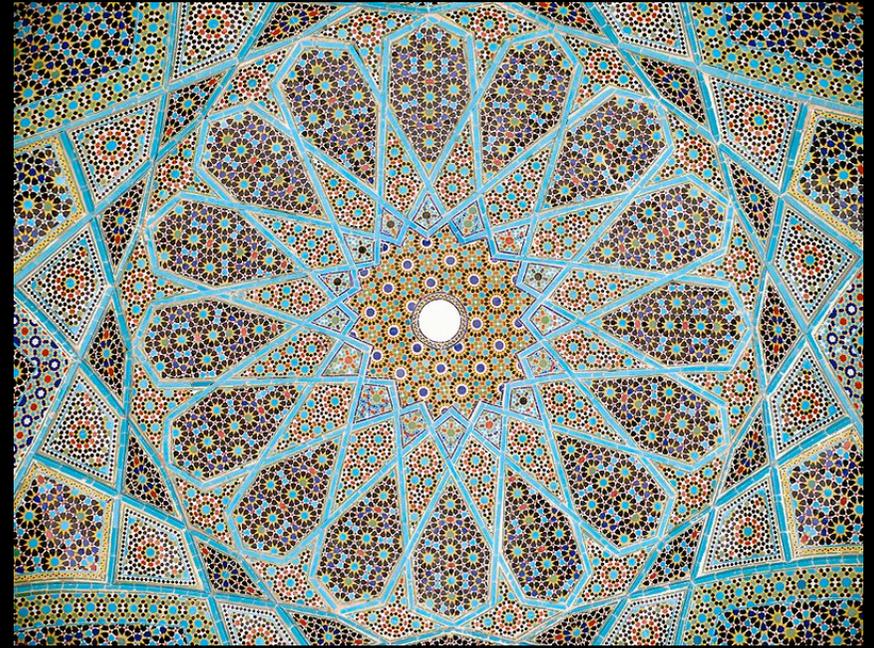
- 人間による歌よりも、器楽音楽を賞揚

・音楽の「内容」とは、その音響構造や技法(=「形式」)の内部からうまれる

- 「音楽の内容は響きつつ動く形式である」(ハンスリック, 73)

アラビア風唐草模様

arabesque



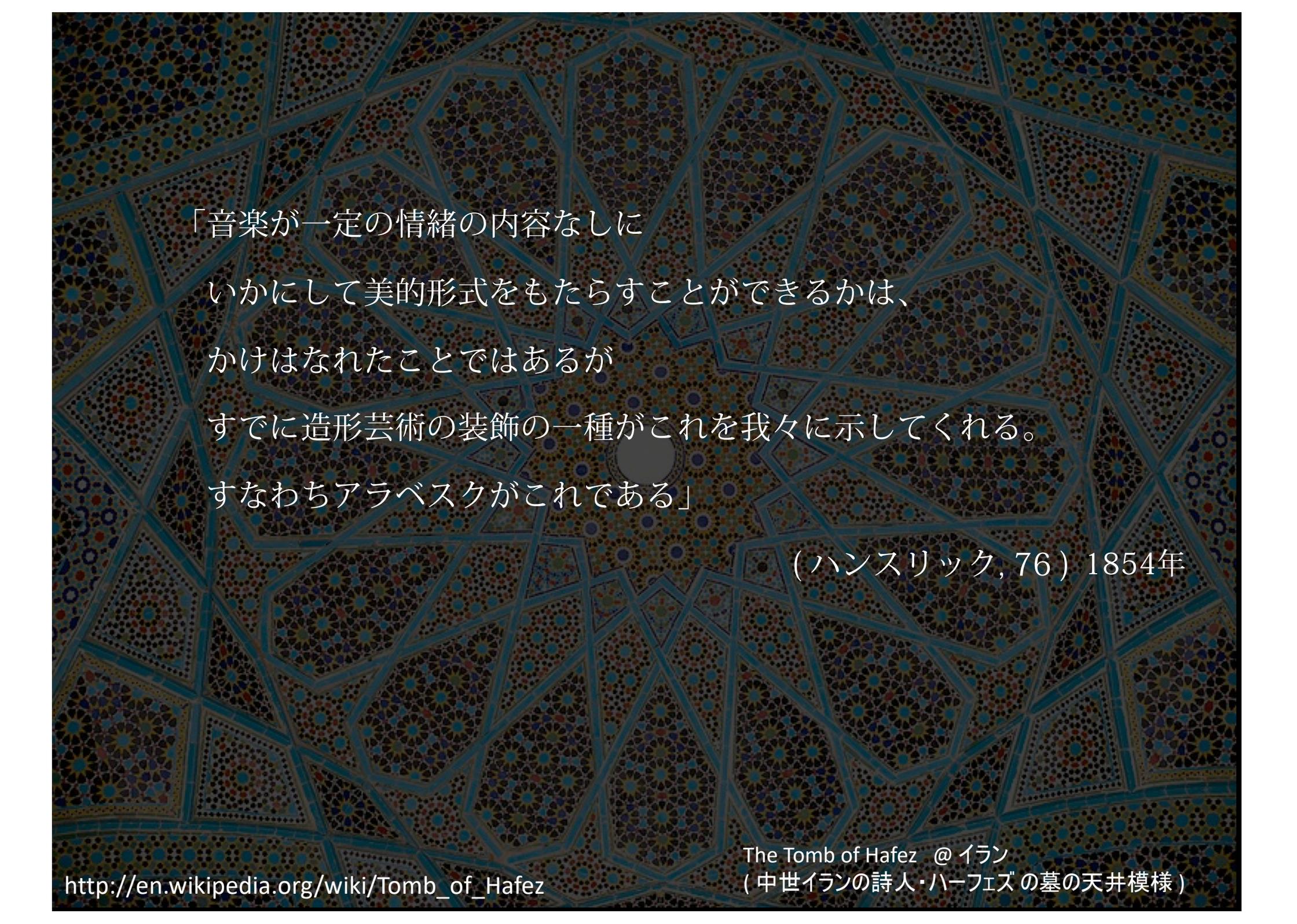
http://en.wikipedia.org/wiki/Tomb_of_Hafez

The Tomb of Hafez @ イラン
(中世イランの詩人・ハーフェズ の墓の天井模様)



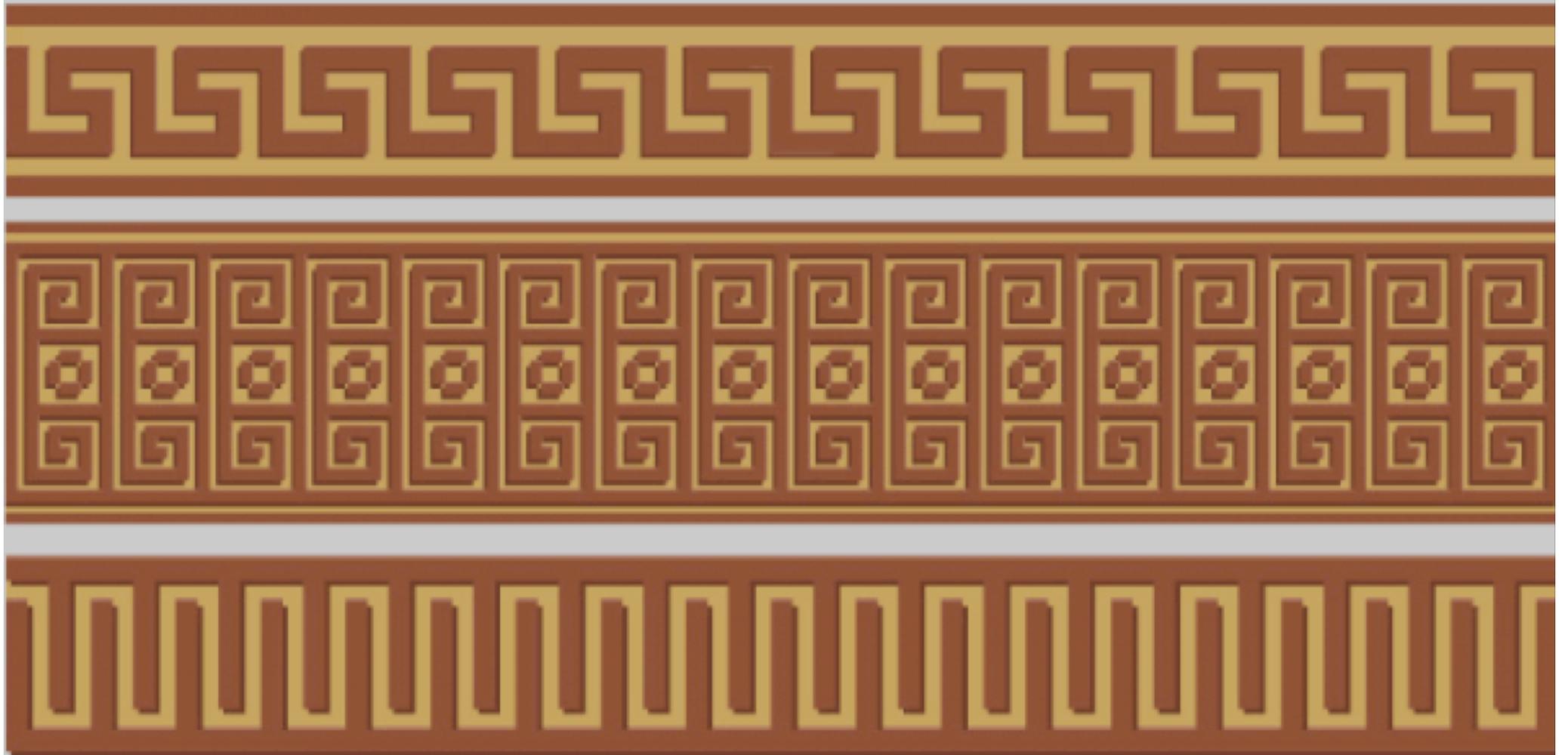
http://en.wikipedia.org/wiki/Tomb_of_Hafez

The Tomb of Hafez @ イラン
(中世イランの詩人・ハーフェズの墓の天井模様)



「音楽が一定の情緒の内容なしに
いかにして美的形式をもたらすことができるかは、
かけはなれたことではあるが
すでに造形芸術の装飾の一種がこれを我々に示してくれる。
すなわちアラベスクがこれである」

(ハンスリック, 76) 1854年



ギリシャ風の線描模様 (雷文)

<http://orname.net/2011/11/16/the-greek-ornament-%E2%80%93-meander-part-1/>

カント： ハンスリックの「形式主義」のルーツ

「ギリシャ風の線描的模様、、、などは、それ自体だけでは
なんの意味ももつものではない。

このような物は、、、一定の概念によって規定されているような
いかなる対象をも標示するのではなくて、、、自由な美なのである。

また音楽において、、、およそ歌詞をもたない楽曲をも、
この種の美の中へ加えてよい」

(カント 『判断力批判(上)』 117) 1790年

「絶対音楽」

「一種の音楽的純粹性の理想的なあり方を示す概念として

一般的には歌詞とか標題とか機能といった音楽外的なもの

から解放された自立的な音楽を指すとともに、さらには

『絶対者』、『絶対的なるもの』を予感させる高い価値をもった

音楽として理解されていると考えてよいだろう」

[三浦, 72]

※ ヴァーグナーは ベートーヴェンの 第9交響曲について「絶対音楽」と名辞した

「絶対音楽」としての ベートーヴェン



Violinen, Klarinetten

ff

Violon

Celli, Bässe

The image shows a musical score for the first movement of Beethoven's Symphony No. 5. It features three staves: Violinen, Klarinetten (Violins and Clarinets) in the top staff, Violon (Violoncello) in the middle staff, and Celli, Bässe (Celli and Basses) in the bottom staff. The music is in 2/4 time and D minor. The dynamic marking *ff* (fortissimo) is present. A speaker icon is located to the right of the score.

楽譜画像：wikipedia 「交響曲第5番 (ベートーヴェン)」より

器楽曲は 他の芸術の援助も混入も一切拒否して、音楽芸術にしかない
独自のものを純粹に表現しているのである」

[ホフマン (1810=1984) , 349-350]

(きわめて近代的な芸術観が反映した言葉)

「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

ウォルター・ペイター「ジョルジョーネ派」『ルネサンス：美術と詩の研究』富士川義之訳、東京：白水社、1993年、141頁。

※ 音楽は外界の模倣に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容を表現しうる表現とみたため。

補足

〈芸術〉 と 〈藝術〉

〈芸術〉と〈藝術〉

- 〈藝術〉は、そもそも、明治期に、西周が “ Art ” を訳すにあたり、新たにつくった語
- 〈藝術〉の語をつくるにあたり、それが漢字であるため、西は、中国の書を参照した
- 〈藝〉の字は、『論語』や『周礼』(しゅうらい) にみられる。 前漢 (前2世紀)
- 当初、西は〈藝術〉としたが、のちに、その略語として〈芸術〉が普及した

出典：今道友信 『美について』講談社現代新書、1973年、75～76頁。

〈芸術〉と〈藝術〉

- ・「藝」の意味とは [今道、75-76頁]
 - 「ものを種える」 [うえる, 植える] の意味
 - 「人間精神において内的に成長してゆく或る価値体験を種えつける技」の意味

- ・「芸」の意味とは [今道、75-76頁]
 - 農業用語、音読みは「うん」、訓読みは「くさぎる」
 - 「草を刈り取ること」の意味

- ・つまり、「芸」の語は、「原意の藝とは反対の意味を持つ字」 [今道、6頁]

〈芸術〉と〈藝術〉

「しかし、当用漢字の制度では、[芸の字を]『ゲイ』と読んで『藝』の略字であるという風に定められ普及してしまったので、こういう間違ったことに妥協するのはよくないことではあるが、その制度のもとに育っている多くの読者の便をはかれば、この字[芸]で藝の意味を理解するほかはない」 [今道, 76頁]

「『げいじゅつ』とは、人間の精神によい種子を植えつけるものだと思いますから、芸術ではなく藝術の方が、正しいばかりでなく、それこそ美しいと思いますが、致し方ありません」

[今道, 6頁]

主な参考文献・さらなる知識のために

- ・ 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想』白水社 (※ 近代藝術について)
- ・ 渡辺裕 (1997)『音楽機械劇場』新書館 (※ 近代藝術について)
- ・ 岡田暁生(2005)『西洋音楽史』中公新書
- ・ 菅原教夫 (1994)『現代アートとは何か』丸善ライブラリー (※ 近代藝術について)
- ・ 石井宏 (2004)『反音楽史:さらばベートーヴェン』新潮社
- ・ ヴィンケルマン (1755 = 1976)『ギリシア美術模倣論』澤柳大五郎訳、座右宝刊行会
- ・ 小田部胤久(2001)『芸術の逆説』東京大学出版会 (※ 近代藝術について)
- ・ 国安洋 (1991)『〈藝術〉の終焉』春秋社 (※ 近代藝術について)
- ・ E・T・A・ホフマン (1810=1984)「ベートーヴェン・第五交響曲」鈴木潔訳、
『無限への憧憬:ドイツ・ロマン派の思想と芸術』国書刊行会。
- ・ エドゥアルト・ハンスリック (1854=1960)『音楽美論』渡辺護訳、岩波文庫 青503-1。
- ・ 三浦信一郎 (1999)「ベートーヴェン神話の形成と支配:音楽における近代」、神林恒道ら
編『芸術における近代』ミネルヴァ書房。